

# 藤田美術館蔵本絵詞『阿字義』解説・翻刻並びに索引

佐々木 勇・寺田 守  
小松原有子・馬野奈緒子  
広島大学日本語史研究会

大阪市の財団法人藤田美術館に、重要文化財『紙本著色阿字義』一巻が所蔵されている。

その全体のカラー写真が、幸いにも、『続 日本絵巻大成 10』（一九八四年、中央公論社）および『続 日本の絵巻 7』（一九九〇年、中央公論社）に、収められている。ともに、現在も中央公論新社から出版されており、入手可能である。

『紙本著色阿字義』は、文化庁の重要文化財指定名称である（絵画として指定された）。ただし、近世以降、「阿字義」「阿字義伝」と呼び慣わされており、右の複製本でも「阿字義」としている。

本稿では、この通称に従い、単に「阿字義」と呼ぶ。

本稿は、絵巻『阿字義』詞書きの国語資料としての重要性に鑑み、先行研究に導かれて若干の解説を付すとともに、翻刻・語彙索引・漢字索引を作成したものである。

## 藤田美術館蔵本絵詞『阿字義』解説

### 一、書誌

#### 1. 装丁・法量

本資料について、詳しく論じたものに、次の文献がある。

文献1 松原茂「經典絵巻の種々相」（『続 日本絵巻大成 10』所収）

文献2 小松茂美「解説」（『続 日本の絵巻 7』所収）

文献3 成原有貴「阿字義絵の詞書編者と絵をめぐる新知見」

（『佛教藝術』二二一号、一九九三年十一月）

以下、文献1・2・3として引用する。

書誌については、ほぼ、文献1・2に記されているとおりである。（藤田美術館のご高配により、原本閲覧の機会が得られ、直接確認することができた）。

本稿に取り上げた『阿字義』は、一卷十六紙の卷子本である。本紙の料紙は、斐紙で、茶または紫に染められたものを、交え用いている。複製本に見られるとおり、料紙には金銀切箔等の装飾をほどこしている。

各紙の寸法は、次の通りである。

縦、二十六・〇cm。各紙長は、第一紙から順に、四六・〇cm・四五・〇cm・四五・二cm・四五・〇cm・四四・九cm・三二・三cm・四

第六紙と第十二紙とが、特に短い。

## 2. 本文の構成

現在一卷とされているこの絵巻は、「阿字義」「阿字功能」「浄三業真言」から成る。

本書一行目に記され、全体の内題のごとくであったため、本書の一般呼称ともなっている「阿字義」は、巻頭の八行分の題目にあたる。それに続き、第一紙の途中から第六紙末までが「阿字功能」、第七紙に「尼像」、第八紙に「公卿像」、第九紙から「淨三業真言」となっている。ただし、「阿字功能」は第六紙末の文章が途中で切れており、続きが存したであろう事と、第十三紙一行目（全体では一六七行目）からは「淨三業真言」の内容と異なるため、項目名を含んだ欠失が存することが指摘されている（文献1）。

第六紙の長さが短いのは、引用の途中で用紙が切斷されたためであらう。また、第十二紙が短いのは、「阿字功能」の続き、または別話が途中まで書いてあつたものを、切斷したためであらう。

また、二枚の絵は、「阿字功能」の本文に対応しており、阿字観を純熟した尼と公卿の姿を写している。「物語絵の中の人物の図様をイメージ・ソースとし、更に宗教的な図像を重ね合わせ、阿字観を表現する絵として新しく特別に制作されたもの」（文献3）と言われている。

### 3. 本文の内容

ア.  
阿字義

梵字第一字「𑖀」の意味を説く。この阿字は、菩提心であり、大日如来の法界の身体そのものである、とする。

## イ. 阿字功能

阿字を觀する方法と功德とを述べる。阿字を觀することにより、死者が生還する「下の功德」、虚空にのぼり十方にあそぶ「中の功德」、および無上正覺にいたる「大の功德」が得られる、とする。末尾に、「唐房法橋御消息」の二行が引かれる。

ウ. 淨三業真言の前半（100  
〜166行目）

「浄三業真言」を冒頭に掲げ、その意味を記す。この真言を唱えれば、諸法の清浄さゆえ、自身も清くなり、三悪道に落ちることがない、と解説される。

エ. 淨三業真言の後半（167行目以降）

法華經の安樂世界と念仏について、説かれる。念仏とは、仏の「無量壽命」を念ずることである、という。最後に食肉の悪であることを述べる。

ここで、ウ部分の「浄三業真言」について、補足する。

引用の真言は、次の陀羅尼の音写である。

om svabhāva śuddhāḥ sarva-dhama svabhāva śuddhoḥām  
本文、一〇一行目では、次のように写されている。

婆(ハ)縛(フ)輪(リン)度(ト)含(カム) (101)

(以下、本資料用例の下に( )に入れて所在行数を示す。)  
真言に付された墨仮名には、朱仮名が上書されている。

しかし、この真言を解説した箇所では、他の訓点同様、墨仮名の

ひて、二合・二合」も略され、娑縛婆縛秣駄薩縛達磨(131)・娑  
 婆縛婆度合(134)とある。用字も異なる。

この「浄三業真言」は、諸種修法の基本となる「十八契印」の第一印に伴うものである。本資料本文にも解説されているとおり、一切の法が清浄であるため、自身も三業(身業・口業・意業。本資料本文では、「身語意」)の清浄を得る、という意である。基本的な護身の真言で、古くから、よく行われたらしい。

仮名書きの一例を、天理図書館蔵『シヤカニヨライネンシユノシタイ(釈迦如来念誦次第)』(1884イ39)鎌倉中期写本から挙げる(原本調査に依る)。

シヤウ・サンコウノ・シンコン・ヲノ・ヲノ・一ヘンヲ・シユウセヨ  
 シンコンニイハク

ヲーム<sup>①</sup>ソ<sup>②</sup>ハ<sup>③</sup>ハーム<sup>④</sup>ハ<sup>⑤</sup>・シユ<sup>⑥</sup>タ<sup>⑦</sup>・サ<sup>⑧</sup>ーラハ<sup>⑨</sup>タ  
 ーラ<sup>⑩</sup>マ<sup>⑪</sup>・ソ<sup>⑫</sup>ハ<sup>⑬</sup>ハーン<sup>⑭</sup>ハ<sup>⑮</sup>・シ<sup>⑯</sup>ーユト<sup>⑰</sup>カ<sup>⑱</sup>ーム<sup>⑲</sup>・

仮名音写・声点加点ともに、本資料とは異なる。平安中期以後、陀羅尼の声点は、文献ごとに様々であつたらしい。

#### 4. 伝来

本資料制作時の所蔵者は、不明である。しかし、「模本や詞書の原典に、九条家関連の人々の名が頻繁に登場する点から」、九条家関連の人物が制作者・享受者であろうと推測されている(文献3)。近世以降の所持者については、文献1に詳しい。

#### 二、先行研究

本絵巻は、複製本が出版されるまで、ほとんど世に知られていな

かった。図版として、二枚の絵が紹介されたことがあつたに過ぎない。

しかし、一九八四年の複製本出版によつて、研究は、大きく進展した。

#### 1. 本文の成立と編者

文献1で、「阿字功能」は、覺鑊(一〇九五―一一四三)の『阿字観』を引用したものであろうことが指摘された。

ただし、文献1は、覺鑊『阿字観』を、底本不明の『興教大師全集』(一九三五年、世相軒)とそれを訓読した『興教大師撰述集』(一九七七年、山喜房佛書林)とから引いていた。その後、『阿字観』の現存写本の調査に基づき、本資料詞書きに最も近いのは、叡山文庫蔵本であることが言われた(文献3)。この叡山文庫蔵本は、『興教大師全集』本に欠けている、「阿字義」に対応する部分をも持つ。

次に、文献3の口絵写真から、叡山文庫本『阿字観』における本資料「阿字義」相当部分を引用する。

𑖀字義此𑖀字者是十方三世諸仏与一切衆生無二無別本性清淨理也。是則菩提心之鉢也此則法身如来此𑖀字一切法寂靜鉢不生不滅此𑖀字是胎藏界大日如来法界身也

文献3の指摘のとおり、本資料詞書きは、これを訓読し、仮名交じり文としたものであろう。「阿字功能」についても、「唐房法橋御消息」を除く全文が、覺鑊『阿字観』の読み下し文であるといえる。この点は、文献3に詳しいため、引用は省略する。

それに続く「唐房法橋御消息」は、天台宗寺門派行円(源国輔・

唐房法橋（九八六—一〇四七）のものと考えられている。そして、真言宗の『阿字観』と天台僧行円の消息とを同時に引用していることから、禪林寺の永観（一〇三二—一一一一）の法系に連なる人物によつて、本文献が作成されたのではないかと推測された（文献1）。また、小松茂美「図版解説」（『続 日本絵巻大成 10』、所収。『続 日本の絵巻 7』にも転載）は、「永観みずからが撰述したのではなかったか」としている。

これに対し、別の可能性として、天台宗の僧が協力をし、仏教の教義のある貴族が編纂したという説が出された（文献3）。これは、「法華経と念仏」について述べた最後の文章に、教義的な一貫性が無く、詳細な説明がなくなることと、本書の詞書全体が、阿字・真言・法華経・念仏といったさまざまな内容の文章から成り立つことから、推測されたものである。このような構成は、「天台宗の阿字観に関する著作の方に認めることができた」という。

## 2. 書写の時期

本資料は、先に述べたとおり、いくつかの部分からなる。ただし、本文は、すべて同筆である。

本書の書写時期は、書風・画風・料紙の装飾から、文献1では、「十二世紀の後半、一一七〇—一八〇年代」と推定されている。また、文献2は、「平安時代末期、一一六〇—一八〇年のころ」とする。いずれにしても、成立後間もなくの書写ということになる。

## 3. 詞書の言語研究

文献1・2・3の研究は、詳しいもので、日本語研究にとつても、有益なことがらが記されている。

しかし、最初の複製本出版から二十年近く経つ現在も、日本語研究を主目的として本資料を活用した成果は、公表されていない。

また、それぞれの複製本に、釈文が付されている。ただし、当該複製本の目的から、広く一般の読解を助けるためのものである。解釈上の誤りも存し、日本語史研究のための本文として、適切ではない。

そこで、本稿に、翻刻と語彙索引・漢字索引を公表する次第である。以下に、今後の研究を期し、若干のことがらを記す。

## 三、文字・表記

本資料の本文は、本稿の翻刻のとおり、漢字と平仮名とで書かれている。

漢字平仮名交じりの本文は優美であり、その書風は、「寂蓮様」であるとされている（文献1）。

また、本文中の漢字に、豊富な片仮名および類音字の訓点が見られ、真言部分の漢字には声点が加点されている。

さらに、本文には、当該行第一字の上に、話の始まりを示す点が加点されることがある。また、本文中央に、句切り点が見られる。この上欄の点および句切り点は、はじめ墨点で加点され、その上に朱点を置いたものである。朱点が重ねられなかった墨点も、わずかながら存する。（翻刻ではこの朱墨を区別しなかった。複製本において確認願いたい。）

これらの訓点が、本文献の言語研究資料としての価値を高めている。

## 1. 漢字

## ア. 字体

同一漢字を別字体で書いたものがある。

「釋」と「釈」、「佛」と「仏」、「華」と「花」、がそれである。前二者の具体例は、つぎのとおりである。

釋迦牟尼佛<sup>シヤカムニホトケ</sup> (172) 釈迦仏<sup>シヤカホト</sup> (173)

初出例では、「釋迦牟尼佛」と書き、次の行では、「釈迦仏」としている。「シヤカムニホトケ」という正式名称の時には、「釋」「佛」を用い、略称の時には「釈」「仏」を用いている。

「華」が用いられるのは、「妙法華經」(162)の一例であり、他十三例は、「蓮花」「法花」「法花經」「妙法蓮花」「妙法蓮花經」と、「花」が用いられている。一六二行目の「妙法華經」は、同義の「法花經」「妙法蓮花經」の用例に先立つ。ここでも、先行例に「華」を用いたものかも知れない。

右のような点が存するため、本稿の翻字においては、右に指摘した字体差を活かした。

## イ. 付訓の有無

本資料の訓点加點者は、原則として、すべての漢字に振り仮名を付そうとしたようである。振り仮名が無いことがあるのは、次の諸字である。

〔單字〕(熟語の中で当該字のみ加點がない場合を含む。)

一・三・四・五・六・八・十・百・上・佛・人・心・身・生・  
申・也・無・念

〔熟字〕(語の全体が付訓されない場合を言う。)

一切・云く・阿字義・淨三業真言

衆生 (58) 〈52行目には加點あり〉

三身如来 (120・124) 〈119行目には加點あり〉

〔單字〕・〔熟字〕ともに、証明は難しいが、日常生活上あるいは佛教関係の文章において、常用された字・語であろう(〔熟字〕の「阿字義」「淨三業真言」は、題目にあたる部分であり、問題が異なる)。

〔單字〕において、「一」は全十七例、「三」は全十六例、「八」は全四例、「十」は全五例、「百」は全二例に、振り仮名が振られていない。また、「上」は、「上正覺」<sup>シヤウサウ</sup> (82) が本資料本文における唯一例であり、加點されていない。本資料において、「上」は、漢字音「ジャウ」を示す類音字として使用される(後述)。よって、加點するに及ばないと判断されたものであろう。

他の〔單字〕は、音注加點例をも持つ。

一方、〔熟字〕の「衆生」「三身如来」は、当該例に先立つ例には、加點されている。

詳細は、漢字索引を御覧頂きたい。

## 2. 平仮名

助詞「とも」(一例)「ども」(三例)の「も」が、全例「ん」の字形で書かれている。その「とん」は、すべて連綿である。これに対し、「ともかくも」(170)では、「も」の字形であり、連綿にされていない。

助詞の「ヲ」を、「お」とする例が一例だけ有る。

をこなひおは (183)

他の八三例の助詞ヲは、「を」で書かれる。唯一例なので、理由の推測は困難である。

### 3. 片仮名

訓点の片仮名は、本文と「墨の色も異なり、その書風から鎌倉時代のものと思われる」とされる（文献1）。

しかし、一方で、本文の「書写を完了した人が、時を移さず加点したもの」とも言われている（文献2）。

そこで、左に、訓点の片仮名字体表を掲げる。

ア	カ	サ	タ	ナ	ハ	マ	ヤ	ラ	ワ	ン
イ	キ	シ	チ	ニ	ヒ	ミ		リ	キ	量符
ウ	ク	ス	ツ	ヌ	フ	ム	ユ	ル	ヰ	モ
エ	ケ	セ	テ	ネ	ヘ	メ		レ	ヱ	コ
オ	コ	ソ	ト	ノ	ホ	モ	ヨ	ロ	ヲ	チ

この仮名字体から、本文書写と同時期、院政時代末期の加点であると判断される。本文書写後、さほどの時を経ずして、加点されたものと思われる。

この振り仮名も、一筆のようである。しかし、この振り仮名が本文と同筆か否かは不明である。

なお、この片仮名は、まれに、平仮名に振られる場合がある。

は、(89) に、(93) わ、(237) た、(238)

### 四、音韻

#### 1. 和語の音

和語の音について知られることは、少ない。

次に、音便の例を挙げる。

イ音便 清しーきよい事 (149) 説くーと (と) いたまへり (161)

撥音便 なかゆるそ (31)

その他、「ハ行転呼音」の例、オとヲとが同音となっていたことを示す例など、他の院政期資料同様に、存する。翻刻・索引を参照したい。

#### 2. 漢字音

本資料の漢字音は、漢字に付された片仮名の訓点によって知ることができる。

また、わずかながら、字音語を仮名表記した次例がある。

ゑ (絵) (13) なむ (難) して (197) えう (要) (229)

#### ア. 字音の系統

その字音は、翻刻・索引によって知られる如く、「功・木・六・供」等、呉音読で統一的に読まれている。仏教の教えを説く内容から、呉音が選ばれたものであろう。

明らかな漢音読として指摘できるのは、次の一例のみである。

命ーメイ 延命 (238) (これ以外の全加点六例は、ミヤウ。)

「延命」の語は、本資料にこの一例しかない。したがって、漢音の

出現理由は不明である。しかし、同じく呉音読中心資料の親鸞『三帖和讃』に、「息災延命」（浄土和讃113―2）の例がある。よって、「延命」は、現在と同じく、「エンメイ」と音読されるのが当時一般的であり、その語音が表れた可能性がある。

呉音読中心資料は、『法華経』・『大般若経』等の字音直読資料であつても、若干の漢音読を交えるのが常である。その状況と対比すると、本資料の加点到、漢音が右の一例のみである点は、注目される。

#### イ. 字音の実態と加點時期

先に記したごとく、訓点の加點時は、書風から、院政期とする説と鎌倉期とする説とがあつた。

そこで、院政期から鎌倉期にかけて起こつたとされている漢字音上の変化について、本資料の片仮名表記例を調査してみる。

#### a. 漢字音韻尾 m・n の混同

韻尾 m・n の表記は、次のとおりである。

#### m 韻尾

ム表記 音・含・心・男・庵・品・念 以上、七字（三六例）

（他の表記例は、無し。）

#### n 韻尾

ン表記 安・因・雲・延・観・間・言・根・純・真・身・人・尊・煩・門・輪・連・邊・引・善・短・本・満・印・遠・願・見・現・散・寸・分・変・遍・便・曼

以上、三五字（九六例）

ム表記 槃・善 以上、二字（二例）

右のごとく、m 韻尾をム、n 韻尾をンとする古用に、原則として

適っている（具体例は、漢字索引を参照）。

n 韻尾をムとする二字の用例は、「涅槃經」（219）・「攝善法戒」（122）である。「槃」は、唯一の加點例である。ムとされるのは、梵語音写字のためであろうか。また、「善」は、他に二例のン表記例を持つ。

#### b. 合拗音の直音化

帰ークキ（三例）、花・華ークエ（十四例）、とされ、揺れは無い。合拗音の直音化例は、指摘できない（クワ・クワンも、当然、カ・カンとはされない）。

#### c. 拗音の類音字表記

本資料には、類音字として、「上」が使用されている。

「上」が加點された漢字は、「淨」（十四例）と「靜」（一例）とである。他資料同様、類音字「上」は、「ジャウ」を示したものである。

以上の三点について、本資料の漢字音は、先に仮名字体から判断した院政末期の実態を反映していると見て矛盾はない。

#### ウ. 本資料の特徴

本資料において注目されるのは、次のような字音注である。

衆生・純熟・術・出・寿・修して・誦する

これらは、字音直読資料・漢文訓読資料では、「衆生・純熟・術・出・寿・修・誦」とされるのが、当時一般であつた。

ところが、本資料の仮名表記は、右のごとく、当時の訓点における傾向とは異なり、和文の字音語仮名表記に通ずるものがある。

しかし、これは、特異な例ではない。それまで、平仮名書きされることが普通であつた和歌を片仮名で書くことが増えるのも、この

院政期である。その中で、有名な『極樂願往生歌』（一一四二年書写）には、和文的な字音表記が見られる<sup>(1)</sup>。

また、本資料は、唇内入声を、大部分、ウ表記にしている。促音化音を反映した表記は、見られない<sup>(2)</sup>。これは、和文系の表記法である<sup>(3)</sup>。

本資料の字音表記が和文的であるのは、制作の背景に、「高貴な女性の存在」が想定されていることと関連するものである<sup>(4)</sup>。

なお、このような字音注は、いくつかの部分に分かれる本資料の、全体に通じている。よって、字音注は、編者あるいは書写者が一括して加点したものであろう。

以上、本資料の字音注から、当時の字音表記が多様であったことが知られる。そしておそらく、その背景にある実際の発音にも幅があったことが推測される。本資料は、文字化されることが少ない層の発音を記したのではないかと考えられる。

## 五、文法

本資料は、平安中後期の和文をもととした「文語文法」、あるいは院政期の漢文訓読法に、おおそ適っている。

動詞をうける「得」は、「……すること」等と、「こと」を取る。

また、「供養す」も、「……を供養す」である<sup>(5)</sup>。

## 六、語彙

原則としてすべての漢字に振り仮名が存する点が、語彙研究にとっても、有意義である。

### 1. シヤカムニホトケ・シヤカホトケ

たとえば、仏教関係語が仮名文に使われたときの読みを知ることができる。これらは、『今昔物語集』等の仮名交じり文では漢字で書かれるのみで読みを知り得ない。また、『色葉字類抄』等の国語辞書には掲載されることが少ない。さらに、字音直読資料では、当然、すべて音読される。

ところが、本資料によつて、「釋迦牟尼佛」「釈迦佛」は、「シヤカムニホトケ」「シヤカホトケ」と読まれていたことが知られる。『法花百座聞書抄』には、「尺迦牟尼仏ケ」（裏<sup>330</sup>）の例があり、『梁塵秘抄』には、「釋迦牟尼ほとけ」「尺迦牟尼ほとけ」等の例がある。さらに、和文の仮名表記にも、「やくしほとけ」（御物本『更級日記』一ウ4）などの類例を指摘できる。

本資料の例を加えることによつて、この場合、音訓混読が特殊ではなかったことを確認できる。

### 2. 「御」の読み

しばしば問題とされる、尊敬語「御」の読みにも、用例を提供しにくれる。

本資料では、「御願」(21)を「コクワン」とする以外は、付訓全七例、すべて「ラム」と読んでいる。

御消息(97)・御すかた(113)・御名(123)・御心(149・209)  
御いのり(209)・御こと(214)

### 3. ハワ(母)

また、貴重な例として、「母」(237)がある。

『日本国語大辞典』（第二版）には、「はわ」「ハワ」と表記さ



れた例に、元永本『古今集』・保延本『法華經單字』・『古本説話集』・『日蓮遺文』等を、挙げてゐる。また、亀井孝「ハワからハハへ」（『言語文化』四（一九六七年十一月））。後、『亀井孝論文集3』に所収）には、「古今訓点抄に、「ハハ」のおどり字にこれを「ワ」とよむべきむね注している」との指摘がある。同様な例は、毘沙門堂本『古今集注』（鎌倉時代末く南北朝期写本）八八五番歌の詞書きにも見られる。

本資料の例は、「ハワ」の比較的古い用例として、これらに加えられる。

なお、本資料の「ハワ」は、「母」に対する振り仮名として表れる。本行を「は、」とする場合（89行目）は、それと同じく「ハ、」と付訓している。

#### 4. 「和文語」「漢文訓読語」

『源氏物語』と『大慈恩寺三藏法師伝』訓点本との語彙の比較によつて導き出された「和文語」「漢文訓読語」の対は、本資料中に、つぎのように表れる。

「和文語」——「漢文訓読語」

やうなり（196・211）——とし（26・28・29・35・45・55・107・140・142・146）  
 . 149・157・158

す（180・192・205・214・215・231）・さす（198・205・210）——しむ（39）

「やうなり」「す・さす」は、「淨三業真言」に続き、題目部分が欠損している「法華經の安樂世界と念仏」について記した部分にのみ表れる。それ以前は、「ごとし」「しむ」のみである。そして、「やうなり」「す・さす」が使用される部分には、「ごとし」「し

む」は出現しない。

先に述べた如く、「やうなり」「す・さす」を用いた部分は、それ以前の、阿字・真言について説いた部分と内容的にも異なつていた。

その他、「和文語」とされる次の諸語も、この部分にのみ出現する。

いみじ（208）・もしくは（208）・おはします（229・231）

いと（236）・いといと（228）・はべり（補助動詞的な用例。170

・177・184・201等。ただし、99行目の消息引用文にも見られる。）  
 候（補助動詞的な用例。197・216・236）

そして、「漢文訓読語」とされる次のものは、「法華經の安樂世界と念仏」について記した部分よりも前（166行目以前）にのみ、出現する。

いまだ・・・（否定）（12・34）・なをし・・・ごとし（25）

まさに・・・べし（57）・あたはず（60）・きたる（63・65）

やうやく（67）・もとも（87）・うやまふ（164）

よつて、本資料の全体は、語彙についても、一様ではない。

#### 七、文章・文体

先に、本資料の「阿字義」「阿字功能」は、梵鐙の『阿字観』を訓読したものであることを述べた。

近年、漢文訓点本とその仮名書き本（延書本）との言語を比較する研究が盛んである。『法華經』『観無量寿經』『論語』などの漢文、あるいは『往生要集』『選択本願念佛集』などの和化漢文と、それらを漢字仮名交じり文にしたものが、研究資料とされている。

本資料の「阿字義」「阿字功能」の部分は、和化漢文『阿字観』の仮名書き本として、それらに加えられることになる。短文ながら、和化漢文を読み下した仮名書き本の現存資料としては、比較的古いものである。<sup>21)</sup>

これに続く、「浄三業真言」の一六六行目までは、出典が存したものでどうか不明である。しかし、「漢文訓読語」が見られることは、先述の通りであり、何らかの典拠が存するものかも知れない。最後の部分、一六七行目以降は、文献3が指摘するとおり、文体が明らかに異なる。文献3は、この部分を、「在家者によつて執筆された」と推定する。説明の後、「かのこといとう／＼えう（要）におはします」と、念押しをするなど、特定の個人に申し上げる形の丁寧な文章である。この部分に出典があったとは考えにくい。

以上、筆者の力不足のため、繁簡さまじまな上、不十分な解説となった。

本資料が、日本語の研究資料として活用されることを願う。

## 注

- (1) 『密教辞典』（一九七五年、法蔵館）、『密教大辞典 増訂版』（一九六九年、法蔵館）等、参照。
- (2) 沼本克明「梵語の四声点の機能」（『声明譜本の日本語史的研究』（二〇〇二年三月、平成11年度科学研究費補助金 研究成果報告書）所収）、参照。
- (3) 「国華」四五五・四五六号（一九二八年十一月）、『原色日本の美術 8』（一九六八年、小学館）、『重要文化財 9

絵画Ⅲ』（一九七四年、毎日出版社）等。

(4) 文献3には、叡山文庫蔵本について、詳しいことが書かれていない。口絵写真から見ると、『国書総目録』にある元和六年（一六二〇）写本かと思われる。写真により、原本の訓点を付す。

(5) 佐々木勇「日本漢字音史の研究法——平安・鎌倉時代を中心に——」（『日本語学』第十九卷十一号、二〇〇〇年九月）には、注目すべき資料として、簡単に紹介されている。

(6) 『続 日本絵巻大成 10』には、尾下多美子編の詞書翻刻がある。しかし、これも、声点を省略し、漢字字体もいわゆる新字体に統一されている。また、翻刻の本文・訓点に誤りがある。なお本稿には、紙幅の都合上、釈文を掲げない。ただし、翻刻・語彙索引によつて、われわれの読解・語認定が知られ、先行釈文との相違点は明らかである。

(7) 一五三行目では、「をは」と書かれる。しかし、あるいは、親鸞の仮名遣いに通じるものかも知れない。吉沢義則「親鸞上人の写語法」（『龍谷大学論叢』一九二二年十月）、小林芳規「鎌倉時代語史料としての草稿本教行信証古点」（『東洋大学大学院紀要』一九六五年九月）、金子彰「親鸞の仮名遣い」（『国文学攷』第七六号、一九七八年一月）、参照。

(8) 沼本克明『平安鎌倉時代に於る日本漢字音に就ての研究』（一九八二年、武蔵野書院）第一部第一章、参照。

(9) 小林芳規「訓点における拗音表記の沿革」（『王朝文学』第九号、一九六三年十月）、参照。

(10) ただし、シユの仮名書き例も存する（誦<sup>シユ</sup>136・聚<sup>シユ</sup>122）。

(11) 高羽五郎「極楽願往生歌の拗音の表記——漢字音考察の一b a

—「国語学」四八集、一九六二年四月）、注（5）佐々木論文、参照。

（12）「法花」<sup>ホケウ</sup>（177）「法橋」<sup>ホケウ</sup>（97）と、「攝善」<sup>セツゼン</sup>（121）「引攝す」<sup>インセツス</sup>（130）のフ表記以外は、他の全例（二八例）がウ表記である。

（13）沼本克明『日本漢字音の歴史的研究』（一九九七年、汲古書院）第五部第一章、参照。

（14）文献1では、本文に覺鏤の『阿字観』には無い「男子はかみにむかひ、女子はしもにむかへり」が補入されていること、女人成仏の経文が引用されていることが、女性が関係している根拠として挙げられている。しかし、「男子はかみにむかひ、女子はしもにむかへり」に相当する文章は、叡山文庫本『阿字観』には存する。文献3は、原経文の説明が平易である点から、「貴族女性が対象であった」としている。

（15）訓点においても、平安中期角筆点に平仮名で「すう・す・さく・さう」等の拗音表記が見られることが指摘されている（小林芳規『角筆文献の国語学的研究 研究篇』（一九八七年、汲古書院）第三章）。

（16）春日政治『西大寺本金光明最勝王經古点の国語学的研究 本文篇』（一九四二年、岩波書店）一三二頁、参照。

（17）小松英雄『日本語の歴史』（二〇〇一年、笠間書院）第三章、参照。

（18）築島裕『平安時代の漢文訓読語につきての研究』（一九六三年、東京大学出版会）、参照。

（19）覺鏤『阿字観』の古写本は、『国書総目録』によれば、応永十二年（一四〇五）写の妙法院蔵本が最古のようである。

（20）中田祝夫編『仮名書き観無量寿經 知恩院蔵本 影印と研究』（一九九一年、勉誠社）、古田恵美子「同文脈に於ける語彙の位相 —『往生要集』訓点本と仮名書き本の語彙の訳し分けについて—」（『国語と国文学』六九—十一、一九九二年十一月）・同

「仏典仮名書き本に於ける、元漢文の再読字に対応する語法について —主に『往生要集』の場合—」（松村明先生喜寿記念会編『国語研究』（一九九三年、明治書院）所収）等同氏による一連の論文、西田直樹・西田直敏編『浄福寺本仮名書き『往生要集』影印・翻刻・解説』（一九九一年、おうふう）、中田祝夫・小林祥次郎編『妙一記念館本 仮名書き法華經 研究篇』（一九九三年、霊友会）、佐々木勇「鎌倉時代における『選択本願念佛集』訓点本と仮名書き本の漢字音 —仮名書き本に見られる親鸞の仮名遣い—」（『国語と国文学』七九—七、二〇〇二年七月）、等。

（21）文献3には、叡山文庫蔵『阿字観』が、もう一本紹介されている。それは、漢字平仮名交じりで、元禄二年（一六八九）写本である。これも、本資料とよく似た文章である。覺鏤『阿字観』の仮名書き別本と言える。

〔付記〕特別に原本閲覧のご許可を賜った上、本稿の公刊をお許し下さいました藤田美術館長はじめ美術館の皆様に対し、心より御礼申し上げます。また、委員の先生方からの御指摘により、本稿の誤りを訂正することができました。記して、深謝いたします。

（以上、佐々木勇 記）

## 翻字本文 凡例

一、翻字は、藤田美術館蔵『阿字義』（院政期写本）の原本および複製本（『続日本絵巻大成 10』（一九八四年、中央公論社）および『続日本の絵巻 7』（一九九〇年、中央公論社））に基づく。

一、原本の配行・字詰を保ち、底本の仮名遣いもそのままとし、歴史的仮名遣いに改めることはしていない。訓点・諸符号をもできるだけ忠実に翻字するよう努めた。しかし、製版の制約上十分でない場合がある。常に複製本と照合されんことを望む。

一、漢字の字体は、JIS規格で利用できる範囲において、通行の康熙字典所載の正字体に従うことを原則とした。  
いわゆるJIS外字は、独自に作製した。

ただし、次の諸字については、原本の字体のままに、両字体を区別した。

釋―釈、佛―仏、華―花

一、平仮名・片仮名の字体は、現行の字体に改めた。

一、漢字に加えられた声点は、漢字の右下に（平）（平濁）（上）（去）として示した。

一、翻字に際し、注が必要と思われる点は、当該箇所にも「」に入れて記した。

一、翻字本文は、佐々木勇・寺田守・馬野奈緒子・小松原有子・佐藤善宏・埤憲子・西尾美紀・山内寛和で作成した。

一、製版にあたっては、金水敏氏のホームページ「[LaTeXによる古典籍のコード化のためのマクロ作成](#)」で公開されているマクロを使わせていただいた。

一、製版のものとファイル作成には、寺田守提案の方式がとられ、入力全般に亘って同氏の尽力が大きかった。

1 阿字義

2 ・此阿字は・是十方三世の・諸佛と・一切

3 衆生との・無二無別の・本性清淨

4 の・理なり・是則・菩提心の・躰なり・

5 是則・法身如来なり・この阿字は・

6 一切法の・寂靜の・躰にして・本不

7 生不滅なり・この阿字は・これ・胎

8 蔵界の・大日如来の・法界の・身

9 也

10 阿字功能

11 ・もし・はしめて・この字を・觀せ

12 むとときに・心いまた・純熟せずは・

13 まつゑに・蓮花を・かき・月輪の・中

14 に・阿字を・かきて・觀すへし

15 ・若人・此觀を・純熟せむ・ときには・

16 この字の・ひかり・むねの・なかより・

17 四方に・散して・あまねく・十方の・

18 一切佛刹に・遍せむ・このひかりは・い

19 たゞきより・あしに・いたりて・行者

20 の・身を・めくり・めくらむ

21 この・阿字を・あきらかに・觀する

22 ときには・六根の・もろ／＼の・垢・みな

23 すへて・清淨に・なりぬ・六根純

24 淨にして・無垢なるかゆへに・心性

25 も・また・垢なし・なをし水精と・淨

26 月との・ことし・世間の輪の・めくる

27 ときには・一切の草木の・くたけ・

28 やふれすと・いふ事・なきかことく・

29 この阿字輪も・またかくのことく・よ

30 く一切の無明の煩惱を・のそくに・く

31 たけうせすと・いふ事なし・なか

32 ゆゑそ・八葉を觀して・おほくも

33 せす・くなくもせぬ・おほよそ・ひ  
 34 との心のかたちは・蓮花の・いまた・  
 35 ひらけぬか・ことし・八分に・わかれ  
 36 たるすちあり・男子は・かみにむか  
 37 ひ・女人は・しにもむかへり  
 38 今此心を・観して・それを開敷  
 39 せしむるなり・此八葉は・四佛・四菩  
 40 薩なり  
 41 薬の・具足・せるは・そのころあ  
 42 り・蓮花三昧の・心・若・開敷すると  
 43 きには・無量の・法門具足す・百八  
 44 三昧門・五百陀羅尼門なり・かく  
 45 のとき・無量無邊の・法門具足せ  
 46 すと・いふことなし・もし諸佛を・  
 47 みたてまつらむと・おもはむひと・  
 48 諸佛を・供養したてまつらむ  
 49 と・おもはむ人・菩提を・證發せ

50 むと・おもはむひと・諸菩薩と・おな  
 51 しく・うまれ・あはむと・おもはむ  
 52 人・一切衆生を・利益せむと・おも  
 53 はむひと・一切悉地を・えむと・おも  
 54 はむひと・一切智を・えむとおもは  
 55 む人・かくのとき事を・もとめ  
 56 むひと・さらに・他の術なし・たゝ  
 57 し・まさに・この阿字を・観すへし・  
 58 一切衆生の・自心は・もとより・このかた・  
 59 清淨なれとん・無明の・ために・おほ  
 60 ひ・かくされて・さとり・こと・あたはさ  
 61 るなり・若・此心を・きよめつれば・  
 62 すなはち・それ曼荼羅となりぬ・  
 63 餘處より・きたりたまふに・あら  
 64 す・いまこの・阿字も・またほかよ  
 65 りきたりたまふにあらず・たゝ心

- 66 より・生せるなり・定<sup>チヤウ</sup>を・修<sup>スウ</sup>して・その心<sup>コハロ</sup>・やうやく・きよくなる・心清淨<sup>シンシヤウジョ</sup>
- 67 なるかゆへに・阿<sup>ア</sup>字<sup>ジ</sup>・なかに・現<sup>ケン</sup>す・阿<sup>ア</sup>字<sup>ジ</sup>門<sup>モン</sup>に・いるかゆへに・大果報<sup>ダイクワフホウ</sup>を
- 68 う・ひとのよく・さつくるにあらず
- 69 ・若<sup>モシ</sup>・短命<sup>タンメイ</sup>のひと・日<sup>ヒ</sup>・三時<sup>サンジ</sup>に・この字<sup>ニは横り消シ</sup>
- 70 を・思惟<sup>シユイ</sup>せは・長壽<sup>チャウスウ</sup>をえむ・若<sup>モシ</sup>いて
- 71 いるいきの中に・此<sup>コノ</sup>字<sup>ジ</sup>を・おもは・壽<sup>スウ</sup>
- 72 命<sup>メイ</sup>・長遠<sup>チャウエン</sup>・なることをえむ・此<sup>コノ</sup>阿<sup>ア</sup>字<sup>ジ</sup>の・
- 73 菩提心<sup>ホタイシン</sup>は・不生<sup>フシヤウ</sup>不滅<sup>フメツ</sup>門<sup>モン</sup>・なるかゆへに
- 74 なり・出入<sup>スツニウ</sup>のいきに・おもは・鼻<sup>ハナ</sup>のう
- 75 へ・五<sup>ゴ</sup>寸<sup>スン</sup>はかりに・この阿<sup>ア</sup>字<sup>ジ</sup>を・觀<sup>クワン</sup>す
- 76 へし・此<sup>コノ</sup>觀<sup>クワン</sup>の・下<sup>ケ</sup>の功徳<sup>クツトク</sup>は・死<sup>シ</sup>にあ
- 77 たれるひと・さらにかへりて・生<sup>シヤウ</sup>する
- 78 ことをう・中<sup>チュウ</sup>の功徳<sup>クツトク</sup>は・虚空<sup>コウコク</sup>に・のほ
- 79 りて・十方<sup>ハウフ</sup>にあそふ・大<sup>ダイ</sup>の功徳<sup>クツトク</sup>は・す
- 80
- 81
- 82 なはち無<sup>ム</sup>上<sup>ジョウ</sup>正覺<sup>セウカク</sup>にいたる・この法<sup>ホウ</sup>を
- 83 ならはむときには・つねに・行住坐<sup>キヤウチュウサ</sup>
- 84 臥<sup>クワ</sup>に・すへし・もし心中<sup>シンチュウ</sup>に・乱念<sup>ミダレヲモヒ</sup>・
- 85 おほくは・かならず・この阿<sup>ア</sup>字<sup>ジ</sup>を・
- 86 觀<sup>クワン</sup>すへし・此<sup>コノ</sup>法<sup>ホウ</sup>は・修<sup>スウ</sup>行<sup>キヤウ</sup>者<sup>シャ</sup>の・ために・
- 87 もとも・急切<sup>キウセツ</sup>なり・つねに心<sup>シン</sup>に・はな
- 88 つへからず
- 89 ・この阿<sup>ア</sup>字<sup>ジ</sup>は・是<sup>コレ</sup>・一<sup>サイ</sup>切<sup>ノ</sup>字<sup>ジ</sup>の・は・なり・
- 90 十方<sup>ハウフ</sup>三世<sup>サンセイ</sup>の・諸佛<sup>ショブツ</sup>の・諸説<sup>ショセツ</sup>の・法<sup>リ</sup>・此<sup>コノ</sup>
- 91 字<sup>ジ</sup>の躰<sup>タイ</sup>に・あらすと・いふことなし・
- 92 わつかにも・念<sup>ネム</sup>するひとは・一<sup>サイ</sup>切<sup>ノ</sup>の
- 93 如来<sup>ニヨライ</sup>の・法<sup>ホウ</sup>を・稱<sup>ショウ</sup>するにおなし・
- 94 乃至<sup>ナイス</sup>くろかね・いしにも・この字<sup>ジ</sup>を・
- 95 觀<sup>クワン</sup>念<sup>ネム</sup>すれば・よくうき・こかねと
- 96 なる
- 97 唐<sup>タウ</sup>房<sup>ハウ</sup>法<sup>ホ</sup>橋<sup>ケ</sup>御<sup>ノ</sup>消<sup>フ</sup>息<sup>ム</sup>云<sup>ニイハク</sup>

- 98 かきはつるまゝになみたをち
- 99 てひかこともやかゝれはへらむ
- 100 淨三業真言
- 101 唵薩<sup>ヲム</sup>縛<sup>ハ</sup>婆<sup>ニ合ハ</sup>縛<sup>ハ</sup>輸<sup>スウ</sup>駄<sup>タ</sup>  
薩<sup>サ</sup>縛<sup>ハ</sup>婆<sup>ニ合ハ</sup>縛<sup>ハ</sup>輸<sup>スウ</sup>駄<sup>タ</sup>  
薩<sup>サ</sup>縛<sup>ハ</sup>婆<sup>ニ合ハ</sup>縛<sup>ハ</sup>輸<sup>スウ</sup>駄<sup>タ</sup>
- 102 婆<sup>ハ</sup>縛<sup>ハ</sup>輸<sup>スウ</sup>度<sup>ト</sup>含<sup>カム</sup>  
婆<sup>ハ</sup>縛<sup>ハ</sup>輸<sup>スウ</sup>度<sup>ト</sup>含<sup>カム</sup>
- 103 この・印真言を・観念する・心は・衆生<sup>スウシヤ</sup>
- 104 の・身語意者<sup>シシコイトイハ</sup>・もとより・きよいこと・あ
- 105 きらかなる・鏡<sup>カミ</sup>の・よろつの・いろ
- 106 かたち・ひとゝきに・さはりなく・うか
- 107 ふへきかことし・六道四生<sup>ロクダクシシヤウ</sup>に・めくる・
- 108 あひた・煩惱惡業<sup>ホシナウアクコウ</sup>の・ちりのために・お
- 109 ほひ・かくされて・きよく・あきらか
- 110 なりとん<sup>も</sup>・しらぬなり・身は・もと
- 111 より・きよきかゆへに・ふたつの手<sup>タテ</sup>
- 112 掌<sup>コハロ</sup>を・合<sup>アヘ</sup>て・蓮花<sup>レンクエ</sup>の・形<sup>カタチ</sup>に・つくる・蓮<sup>レン</sup>
- 113 花<sup>ハナ</sup>の・形<sup>カタチ</sup>といふは・觀自在菩薩<sup>クワンジザイハツサツ</sup>の・御<sup>ミ</sup>す
- 114 かたなり・このゆへに・一切衆生<sup>サイスウシヤウ</sup>の・身<sup>シン</sup>
- 115 業<sup>コウ</sup>・おのつから・きよまはりぬ・舌<sup>シタ</sup>に・
- 116 さへつることは・もとより・きよかり
- 117 ければ・真言<sup>シンゴン</sup>を・誦<sup>スウ</sup>するかゆへに・い
- 118 ひと・いふこと・きよまはりぬ・唵<sup>ヲム</sup>といふ
- 119 事は・法身<sup>ホウシン</sup>・報身<sup>ホウシン</sup>・應身<sup>オウシン</sup>の・三身如来<sup>シシニヨライ</sup>
- 120 なり・この三身如来と・まうすは・
- 121 菩薩戒<sup>ホサツカイ</sup>の・本<sup>ホン</sup>身<sup>クタイ</sup>の・攝<sup>セウ</sup>律<sup>リツ</sup>儀<sup>キ</sup>戒<sup>カイ</sup>・攝<sup>セウ</sup>
- 122 善法戒<sup>ゼンポウカイ</sup>・饒益有情戒<sup>ニョウイックシヤウカイ</sup>の・三聚淨<sup>サンシュヨ</sup>
- 123 戒<sup>カイ</sup>の・あらはれたまへる・御名<sup>ミナ</sup>なり・
- 124 又唵<sup>マタヲム</sup>といふは・歸命<sup>クイメイ</sup>の・詞<sup>コト</sup>なり・三
- 125 身如来<sup>クニミヤウ</sup>に・歸命<sup>クイメイ</sup>して・我<sup>ワレ</sup>を・救<sup>スク</sup>給<sup>ヒタマフ</sup>
- 126 へ・我<sup>ワレ</sup>を・わたし・たまへと・いふなり・



127 または供養の・心なり・此字を・唱  
 128 るによりて・無量の・供養雲海  
 129 をなし・出して・十方聖衆を・供  
 130 養し・六道の衆生を・引攝す  
 131 ることなり・娑縛婆縛毘駄薩縛達  
 132 磨と・いふは・一切の法は・おのつから・  
 133 ひとつなり・きよく・きよしと・い  
 134 ふことなり・娑縛婆縛毘駄含  
 135 といふは・このゆゑに・我また・自性  
 136 清淨なりと・いふなり・真言を・誦  
 137 するちから・一切衆生・みなもとよ  
 138 り・きよかりけるゆゑに・如意輪觀  
 139 自在の・この自性清淨の法に・住し  
 140 たまへるか・ことくになりぬ・心は  
 141 もとより・いさきよきこと・秋の夜

142 の・雲なきそらの・満月の・ことく  
 143 なりければ・六道生死の・なかき  
 144 夜に・めくりて・煩惱のくも・おほ  
 145 ひかくせとん・蓮花の水にありて・  
 146 水にそまさるかことく・きよくき  
 147 よし・此おもひを・心にかけては・  
 148 おもひとおもふ心は・みなきよ  
 149 い事・佛の御心の・ことくになりぬ・  
 150 此自心の・清淨をおもふことを・か  
 151 きりなく・すくれたる事に・する  
 152 なり・このゆゑに・戒經には・菩薩戒  
 153 うけつる・ひとをは・第一清淨の・もの  
 154 となつて・觀無量壽經には・淨土にう  
 155 まるゝ・淨業正因と・ゝき・法花の方便

156 品<sup>ホム</sup>には・諸佛世尊<sup>シヨフツセソン</sup>は・衆生<sup>スウシヤウ</sup>をして・  
 157 佛<sup>ホトケ</sup>のしりたまふかごとく・佛<sup>ホトケ</sup>のみ  
 158 たまふかごとく・自心<sup>シシム</sup>の知見<sup>チケン</sup>を・ひらい  
 159 て・清淨<sup>シヤウ</sup>なることを・えしめむと・  
 160 おもふかゆゑに・よには・いつるな  
 161 りと・ゝいたまへり・提婆品<sup>タイハホム</sup>には・もし・  
 162 善男子善女人<sup>センナムシセンニョ</sup>ありて・妙法華經<sup>メウホウクエキヤウ</sup>  
 163 の・提婆品<sup>タイハホム</sup>を・きゝて・きよき心<sup>コハロ</sup>を・まこ  
 164 とゝし・敬<sup>ウヤマヒ</sup>て・疑<sup>ウタカヒ</sup>を・なさゝらむも  
 165 のは・三惡道<sup>アウクダウ</sup>に・をちすと・のたまへ  
 166 り云く  
 167 ・としころ・三惡道<sup>アウクダウ</sup>には・いらむ・極樂<sup>ゴクラク</sup>には・ま  
 168 いらしと・おもふには・あらねとん・釋迦<sup>シヤカ</sup>  
 169 佛<sup>ホトケ</sup>をのみ・たのみたてまつりて・極樂<sup>ゴクラク</sup>は・  
 170 ともかくも・おもはず・はへりけるを・

171 安樂世界<sup>アンラクセカイ</sup>とは・妙法蓮花經<sup>メウホウレンクエキヤウ</sup>を・なつけた  
 172 てまつる・釋迦牟尼佛<sup>シヤカムニホトケ</sup>を・無量壽佛<sup>ムリヤウスウフツ</sup>  
 173 とは・なつけたてまつるなり・釈迦<sup>シヤカ</sup>佛<sup>ホトケ</sup>  
 174 の・娑婆世界<sup>シャハセカイ</sup>の人を・安樂世界<sup>アンラクセカイ</sup>と・なつ  
 175 くる・妙法蓮花經<sup>メウホウレンクエキヤウ</sup>に・ゐていれたまふ  
 176 を・觀世音<sup>クワンセヤム</sup>とは・なつけたてまつるなり  
 177 と・おもひえ・はへりて・法花<sup>ホクエ</sup>の理<sup>リ</sup>に・いる  
 178 なりければ・安樂世界<sup>アンラクセカイ</sup>に・いりなむと・  
 179 おもひはへる・藥王品<sup>ヤクワウホム</sup>を・見たてまつら  
 180 せたまへ・は如說修行<sup>ニョセチスウキヤウ</sup>と・いふは・安樂品<sup>アンラクホム</sup>を・  
 181 さすなり・安樂世界<sup>アンラクセカイ</sup>にいるへき・を  
 182 こなひなれば・法花經<sup>ホウクエキヤウ</sup>の・をこなひ  
 183 おは・安樂行<sup>アンラクキヤウ</sup>とは・なつけたてまつるに  
 184 そ・はへりける・蓮花<sup>レンクエ</sup>の中に・生<sup>シヤウ</sup>すると  
 185 いへるは・妙法蓮花<sup>メウホウレンクエ</sup>の中に・いりはへる

186 なり・<sup>ミツ</sup>経といふことは・五色のいと・いふ  
 187 ことなり・五色のいと者・きはをさか  
 188 ふ・心也・やかて・界と・いふことなり・安樂界  
 189 といふは・安樂行を・修して・いる・ところ  
 190 なれはに・はへり・このころをしつ  
 191 かに・おほしめして・念したてま  
 192 づらせたまへ  
 193 ・無量壽佛と・まうして・さる佛・別に・  
 194 まします・それを念したてまつ  
 195 るなりと・おもふをは・いたつらに・こと  
 196 人の・たからを・かすふらむ・ものゝやう  
 197 に・益もなき・事になむして候・三歸  
 198 といふ事・うけさせたまひつるひ  
 199 とは・わかころを・一鉢三寶とまう  
 200 して・これを・あらはしたてまつらむ

201 と・おもひはへれは・かの・一鉢三寶  
 202 といふ・わかころの中・無量壽如  
 203 来を・念したてまつるを・まことの・  
 204 念佛とはしはへるなり・其の心を・  
 205 よく・まうさせたまふへきにはへり・  
 206 よろつのこと・いひせめては・た・こ  
 207 のことに・まさること・さふらふましく  
 208 はへり・いみしき・願にまれ・もしは  
 209 御いのりにまれ・すへて・御心より・を  
 210 こりて・この念佛せさせたまはむ・  
 211 やうなる・二世の御願・みたせたま  
 212 ふへきことは・さふらはぬものなり・  
 213 念佛したてまつると・申ことは・彼  
 214 無量壽佛の・御ことを・みたてまつらせ  
 215 たまひ・念したてまつらせ・たまは

216 むこそは・よく候へけれ・されと・念  
 佛三昧經にはまさしく・諸法の・実  
 相を・念するを・念佛と・なつくと・説  
 たまへり・涅槃經には・如来常住に  
 して・変易あることなきを・諸法  
 の実相と・なつくと・説給へり・如来  
 常住・無有變易と・いふは・佛の・無量  
 壽命を・念するなり・これは・即・無量  
 壽佛なり・彼無量壽如来といふは・一切  
 衆生の・心の・本體の・自性清淨の・心  
 といふものを・まうすなり・わか心の・  
 無量壽命を・おもひたてまつるを・  
 念佛とは・申也・かのこといとく・え  
 うに・おはします・さも・さふらひ  
 ぬへからむときには・なを・このことを

231 そ・念したてまつらせおはします  
 へき  
 232 物の・しむらを・くふは・大慈悲の・  
 種を・たつと・經に・のたまへり・大慈の  
 種と・いふは・いはゆる・佛種也・このこ  
 といとなしく・候事也云々  
 236 又・一切衆生は・わか・生々世々の・父母  
 なる  
 238 を・わか・除病延命の・ためにとて・か  
 へりて・そのししを・もちある・きはも  
 239 なき・不孝のとなり  
 240

一、本索引は、藤田美術館蔵『阿字義』に用いられている総ての語を、本稿の翻字本文に基づいて、収めたものである。

一、各項の記載形式は、見出し語・用例・用例の所在とした。

一、見出し語について

1. 見出し語は、平仮名で歴史的仮名遣（字音語はいわゆる字音仮名遣）で統一した。
2. 排列は、最終音節までの五十音順とした。
3. 参照項目を設け、複合語の下位要素からも検索できるようにした。
4. 見出し語は、単語を原則とした。
  - a. 漢語にサ変動詞「す」の付いた形は、一語として扱った。
  - b. 漢語に助動詞「なり」「たり」の付いた形は、二語として扱った。
  - c. 和語を語幹とするいわゆる形容動詞は、一語として認めた。
  - d. 引用されている書名などは、単語に分割せず、そのままの形で掲出した。

一、用例について

1. 用例は、「翻字本文」に基づいて掲出した。
2. 用例の所在は、「翻字本文」に基づいて、算用数字で記した。

3. 用例の引用は、以下の通りとした。

a. 自立語・付属語とも、原則として当該語のみを示した。

b. ただし、活用語は、その用法にに応じて下接語（または語句）も示した。

4. 用例の排列は、以下の通りとした。

a. 活用しない語は、出現順に排列した。

b. 活用語は、未然形・連用形・終止形・連体形・已然形・命令形の順に排列した。

c. 同一単語で、仮名表記と漢字表記とのある場合は、仮名表記を先とし、漢字表記を後とした。

d. 漢字表記の語に振り仮名のあるものと無いものがある場合には、振り仮名のあるものを先とし、無いものを後とした。

e. 同一単語で用例の表記が全同の場合は、初出例の下に所在を記すにとどめた。

一、本索引は、広島大学日本語史研究会の以下の会員が作成した。

佐々木勇・武久康高・寺田守・馬野奈緒子・小松原有子・佐藤善宏・埴憲子・西尾美紀・宮之首聡浩・村山太郎・山内寛和

川越泰子・坂野梨絵・福田弥生・渡辺心・小林広直・土屋俊明・富田みな子・松浦尚紗・山崎真理子・山根雅子

一、索引作成の手順、製版のものとファイル作成は、寺田守提案の方式がとられ、入力全般に亘って同氏の尽力が大きかった。









かならず	85	ぎやうちうさぐわ (行住坐臥)	83	ぐそくす (具足す)	45	ぐわちりん (月輪)	13
かの (彼)	201	行住坐臥	83	具足せす	45	月輪	13
かの	201	きよし (清し)	138	具足せるは	41	くわほう (果報) ↓ だいくわ	
彼	213	きよかりける	116	具足す	43	ほう	
かへる (返る)	79	きよかりければ	146	くだく (砕く)	27	くわん (観)	15
かへりて	238	きよく	109	くたけ	30	観	78
かみ (上)	36	きよくなる	67	くどく (功德)	78	ぐわん (顔) ↓ ぐわん	
かみ		きよいこと	104	功德	80	ぐわん (願)	
		きよい事	148	くろう (功能)	81	願	208
き		きよきかゆへ	111	功能	10	くわんじさい (観自在)	
きく (聞く)		きよき心	163	くふ (食ふ)		によりんくわんじさい	
きゝて	163	淨月	25	くふは	233	くわんじさいばさつ (観自在菩薩)	
きたる (来たる)	63	きよし	133	くも (雲)		観 自在菩薩	113
きたりたまふに	65	きよまはる (清まはる)	146	くも	144	くわんす (観す)	11
きは (際)		きよまはりぬ	115	くやう (供養)	127	観 せむとき	32
きは	187	きよむ (清む)	118	供養	128	観 して	38
きふせつ (急切)	87	きよめつれば	61	くやうす (供養す)		観 すへし	86
急切		く		供養し	129	観 するとき	21
きやう (經)				供養したてまつらむ	48	くわんぜおむ (観世音)	176
きやうじや (行者)	186			くろがね (鉄)	94	くわんねむす (觀念す)	103
行者	234			くろかね		觀念する	

観 <sup>クワン</sup> 念 <sup>ネム</sup> すれは	95	くわんむりやうじゆきやう	95	観 <sup>クワン</sup> 無 <sup>ム</sup> 量 <sup>リヤウ</sup> 壽 <sup>スウ</sup> 經 <sup>キヤウ</sup>	154	くみみやう(帰命)	124	くみみやうす(帰命す)	125	け	げ(下)	78	けり《助動詞》	117 138 143 170 178 184	ける	ければ	げんず(現 <sup>ケン</sup> ず)	68	こ	こがね(黄金)	95	こかね					
こく(虚空)		こくらく(極楽)	80	こくわん(御願)	211	こころ(心) ↓ おむこころ	202	こころ	202	心 <sup>ココロ</sup>	心	こしきのいと(五色の糸)	186 187	ごすん(五寸)	77	こそ	こと(事) ↓ おむこと	216	こと	ことし	236	ことし《助動詞》					
ことく	28 29 146 157 158	ことくになりければ	142	ことくになりぬ	140 149	ことし	26 35 107	こととき	45 55	ことば(詞)	124	ことひと(異人)	195	この(此)	5 7 11 16 18 21 29 57	この	此 <sup>コノ</sup>	90 127 147 150	このかた(此の方)	58	このゆゑに(此の故に)	114 152	このゆゑに	135	こひやく(五百)	44	これ(是)
これ	2 4 5 89	是 <sup>コレ</sup>	7 200 223	さ	さうもく(草木)	27	さかふ(境ふ)	187	さかふ	さぐわ(坐臥) ↓ ぎやうぢやう	さぐわ	さす(指す)	181	さす《助動詞》	210	させたまはむ	198	させたまひつる	さつく(授く)	70	さつくる	60	さとり(悟る)	106	さはり(障り)	106	さはり

さふらはぬ	212
さふらひぬ	229
候 <small>サフラフ</small>	197
候へけれ <small>サフラフ</small>	216
さふらふましく	207
候事 <small>サフラフコト</small>	236
さへつる <small>(轉る)</small>	116
さへつる	
さむあくだう <small>(三惡道)</small>	165 167
三惡道 <small>アクダウ</small>	
さむくる <small>(三歸)</small>	197
三歸 <small>クキ</small>	
さむじ <small>(三時)</small>	71
三時 <small>シ</small>	
さむじゆじやうかい <small>(三聚淨戒)</small>	122
三聚淨戒 <small>シュウカイ</small>	
さむしんによらい <small>(三身如来)</small>	119
三身如来 <small>シンニョライ</small>	120 124
さむぜ <small>(三世) ↓じふはうさむぜ</small>	

さむぼう <small>(三寶) ↓いちたい</small>	
さむぼう	
さむまい <small>(三昧) ↓れんぐゑ</small>	
さむまい	
さむまいもん <small>(三昧門)</small>	
三昧門 <small>マイモン</small>	44
さも <small>(然も) 《副詞》</small>	229
さも	
さらに <small>(更に)</small>	56 79
さらに	
さる <small>(然る) 《連体詞》</small>	193
さる	
さるばだるま <small>(薩縛達磨) 《梵語》</small>	
薩 <small>サル</small> 縛 <small>ハタル</small> 達 <small>マ</small> 磨 <small>マ</small>	101
薩縛達磨	
されど <small>《接続詞》</small>	131
されど	
さんず <small>(散ず)</small>	216
散 <small>サン</small> して	17
し	

し <small>(死)</small>	
死 <small>シ</small>	
じ <small>(字)</small>	
字 <small>ジ</small>	11 16 71 73 89 91 94 127
じ《助動詞》	
し	168
しし <small>(肉穴)</small>	239
しし	
じしむ <small>(自心)</small>	150 158
自心 <small>ジシム</small>	
ししむら <small>(肉叢)</small>	233
ししむら	
ししやう <small>(四生) ↓ろくだう</small>	
ししやう	
じしやうしやうじやう <small>(自性清淨)</small>	135 139 225
自性清淨 <small>ジシヤウシヤウジヤウ</small>	
した <small>(舌)</small>	115
舌 <small>シタ</small>	
しづかなり <small>《形容動詞》</small>	190
しづかに	
じつさう <small>(実相)</small>	217 221
実相 <small>ジツサウ</small>	

しつち <small>(悉地)</small>	
悉地 <small>シツチ</small>	
して <small>《助詞》</small>	
して	6 24 156 220
しはう <small>(四方)</small>	17
四方 <small>シハウ</small>	
じひ <small>(慈悲) ↓だいじひ</small>	
じふつ <small>(四佛)</small>	39
四佛 <small>ジフツ</small>	
じふはう <small>(十方)</small>	17 81 129
十方 <small>ジフハウ</small>	
じふはうさむぜ <small>(十方三世)</small>	2 90
十方三世 <small>ジフハウサミセ</small>	
しほさつ <small>(四菩薩)</small>	39
四菩薩 <small>ホサツ</small>	
しむ <small>(心)</small>	61 225
心 <small>シム</small>	
しむ《助動詞》	159
えしめむ	
しむる	39
しむしやう <small>(心性)</small>	24
心性 <small>シムシヤウ</small>	
しむしやうじやう <small>(心清淨)</small>	

心清淨 シムシヤウ上	67	しやうじゆ (聖衆) シヤウスウ	129	しゆじやう (衆生) スウシヤウ	103 130 137 156	證發せむ シヨウホツ	49
しむちう (心中) シムチウ	84	しやうず (生ず) シヤウス	66	しゆじやう (衆生) ↓いちさ いすうじやう		しよせつ (諸説) シヨセツ	90
しも (下)	37	生せる シヤウ	79 184	しゆす (修す) 修して スウ	66 189	しよぶつ (諸佛) シヨブツ	2
しやういん (正因) シヤウイン	155	しやうじやうせぜ (生世) シヤウシヤウセセ	237	じゆす (誦す) 誦する シユ	136	しよほふ (諸法) シヨホフ	46 48 90 156
じやうかい (淨戒) ↓さむじ ゆじやうかい		じやうど (淨土) 浄土 上ト	154	じゆつ (術) 術 スツ	56	しる (知る)	217 220
しやうがく (正覺) ↓むじや うしやうがく		しやかほとけ (釋迦佛) シヤカホトケ 〔カは撒り消し〕 釋迦佛	168	しゆつにふ (出入) 出入 スツニウ	76	しらぬなり	157 110
じやうこふ (淨業) 浄業 上コウ	155	釈迦仏 シヤカホトケ	173	じゆみやう (壽命) 壽命 スウミヤウ	73	しりたまふかことく	8
じやうさむこふしんこん (淨 三業真言)	100	尼佛 シヤカムニホトケ 釋迦牟尼佛	172	じゆんじやう (純淨) 純淨 シユン上	23	しんこい (身語意) 身語意 シンコイ	104
じやうじ (生死) 生死 シヤウシ	143	寂靜 シヤクシユ	6	じゆんじやう (純熟) 純熟 シユン上	12	しんこふ (身業) 身業 シンコフ	114
しやうじやう (清淨) ↓じ しやうしやうじやう・しむ しやうじやう・ほんしやう しやうじやう	23 59 150 153 159	しやばせかい (娑婆世界) シヤハセカイ 娑婆世界	174	じゆんじやう (純熟) 純熟 シユン上	15	しんこい (真言) ↓じやうさ むごふしんこん 真言 シンコフ	103 117 136
清淨 シヤウ上		しゆいす (思惟す) 思惟せは シユイ	72	しやうす (稱す) 稱する シヨウ	93	す	
		しゆじやう (衆生) しゆじやう					

す(為) ↓ いんせふす・かい  
 ふす・ぐそくす・くやうす・  
 くわんす・くわんねむす・く  
 ゐみやうす・げんす・さんす・  
 しやうす・しゆいす・しゆす・  
 じゆす・じゆんじゆくす・し  
 ようす・しようほちす・ちう  
 す・ねむず・ねむぶつす・へ  
 んす・りやくす  
 せす 33  
 せぬ 33  
 し 164  
 しはへるなり 204  
 すへし 84  
 するなり 151  
 す 《助動詞》  
 せおはします 231  
 せたまはむ 215  
 せたまひ 214  
 せたまふ 205  
 せたまへ 180  
 ず 《助動詞》  
 らむ 164  
 すは 12

す 33  
 すはへりける 170  
 す 88  
 すと 165  
 さる 146  
 さるなり 60  
 ぬ 33  
 ぬなり 35  
 ぬもの 110  
 ねとも 212  
 ぬい(薬) 168  
 ぬい(薬) 41  
 すいしやう(水精) 25  
 水精 25  
 すうだ(輪駄) 《梵語》  
 輪(去) 駄(平濁) 101  
 秣駄 131  
 すうどかむ(輪度含) 《梵語》  
 輪(去) 度(平濁) 含(去) 102  
 秣度含 134  
 すがた(姿) ↓ おむすがた

すぎやうざ(修行者) 86  
 修行者 86  
 すくなし(少なし) 33  
 なくなくも 33  
 すくふ(救ふ) 125  
 救給へ 125  
 すぐる(優る) 151  
 すくれたる 151  
 すち(筋) 36  
 すち 36  
 すなはち(則・即) 《副詞》  
 すなはち 62  
 すなはち 81  
 すなはち(則・即) 《接続詞》  
 則 4  
 斯ナハチ 5  
 即 223  
 すへて(總て) 23  
 すへて 209  
 せ 23  
 せうそく(消息) ↓ おむせう  
 そく 23  
 せけん(世間)

世間 26  
 世尊 156  
 せそん(世尊) 156  
 せふぜんほふかい(攝善法戒) 121  
 攝善法戒 121  
 せふりつきかい(攝律儀戒) 121  
 攝律儀戒 121  
 せむ(責む) 121  
 せめては 206  
 ぜんなむし(善男子) 206  
 善男子 206  
 ぜんによにん(善女人) 162  
 善女人 162  
 そ 162  
 ぞ 《係助詞》  
 そ 32  
 その(其) 184  
 その 231  
 その 41  
 其の 66  
 そばはば(娑縛婆縛) 《梵語》 204



[illegible][illegible]



なし	25
なきかことく	31
なき事 <small>コト</small>	46
なきそら	56
なき不孝 <small>フタコ</small>	91
なきを	28
なす <small>(為す)</small>	197
なさゝらむ	142
なし	220
なづく <small>(名付く)</small>	240
なつけ	129
なつけたてまつる	164
	171
	173
	176
	183
なつくと	154
なつくる	218
なに <small>(何)</small>	174
なかゆゑ	221
なほ <small>(猶)</small>	31
なを	230
なほし <small>(猶し)</small> 《副詞「猶」	+
副助詞「し」	25
なをし	
なみだ <small>(涙)</small>	

なみた	98
なむ《完了の助動詞「ぬ」	+
推量の助動詞「む」	
なむ	178
なむし <small>(男子)</small> ↓ぜんなむし	
男子 <small>ナムシ</small>	36
ならふ <small>(習ふ)</small>	
ならはむ	83
なり《推量伝聞の助動詞》	
なり	136
なり《断定の助動詞》	
なりければ	178
にあらず	63
	65
	70
におはします	91
にして	229
になむ	24
になりぬ	197
にはへり	23
にまします	190
なり	193
	187
	131
	76
	188
	133
	87
	195
	134
	89
	204
	136
	110
	212
	152
	114
	7
	223
	160
	120
	39
	224
	173
	123
	40
	224
	176
	124
	44
	226
	181
	126
	61
	240
	186
	127
	66

なり	6
に《助詞》	12
に	13
	14
	15
	17
	18
	19
	22
80	68
81	69
82	69
83	71
84	73
84	75
86	76
87	77
93	78
	24
	27
	30
	35
	36
	37
	43
	59
	68
	8
	9
	188
	235
	236
	24
	68
	74
	159
	228
	236
	59
	237
	211
	67
	159
	75
	228
	236
	182
	190
	143
	149
	96
	197
	23
	62
	140
	143
	182
	190
	59
	237
	211
	67
	159
	75
	228
	236
	9
	188
	235
	236
	24
	68
	74
	159
	75
	228
	236
	182
	190
	143
	149
	96
	197
	23
	62
	140
	143
	182
	190
	59
	237
	211
	67
	159
	75
	228
	236
	9
	188
	235
	236
	24
	68
	74
	159
	75
	228
	236
	182
	190
	143
	149
	96
	197
	23
	62
	140
	143
	182
	190
	59
	237
	211
	67
	159
	75
	228
	236
	9
	188
	235
	236
	24
	68
	74
	159
	75
	228
	236
	182
	190
	143
	149
	96
	197
	23
	62
	140
	143
	182
	190
	59
	237
	211
	67
	159
	75
	228
	236
	9
	188
	235
	236
	24
	68
	74
	159
	75
	228
	236
	182
	190
	143
	149
	96
	197
	23
	62
	140
	143
	182
	190
	59
	237
	211
	67
	159
	75
	228
	236
	9
	188
	235
	236
	24
	68
	74
	159
	75
	228
	236
	182
	190
	143
	149
	96
	197
	23
	62
	140
	143
	182
	190
	59
	237
	211
	67
	159
	75
	228
	236
	9
	188
	235
	236
	24
	68
	74
	159
	75
	228
	236
	182
	190
	143
	149
	96
	197
	23
	62
	140
	143
	182
	190
	59
	237
	211
	67
	159
	75
	228
	236
	9
	188
	235
	236
	24
	68
	74
	159
	75
	228
	236
	182
	190
	143
	149
	96
	197
	23
	62
	140
	143
	182
	190
	59
	237
	211
	67
	159
	75
	228
	236
	9
	188
	235
	236
	24
	68
	74
	159
	75
	228
	236
	182
	190
	143
	149
	96
	197
	23
	62
	140
	143
	182
	190
	59
	237
	211
	67
	159
	75
	228
	236
	9
	188
	235
	236
	24
	68
	74
	159
	75
	228
	236
	182
	190
	143
	149
	96
	197
	23
	62
	140
	143
	182
	190
	59
	237
	211
	67
	159
	75
	228
	236
	9
	188
	235
	236
	24
	68
	74
	159
	75
	228
	236
	182
	190
	143
	149
	96
	197
	23
	62
	140
	143
	182
	190
	59
	237
	211
	67
	159
	75
	228
	236
	9
	188
	235
	236
	24
	68
	74
	159
	75
	228
	236
	182
	190
	143
	149
	96
	197
	23
	62
	140
	143
	182
	190
	59
	237
	211
	67
	159
	75
	228
	236
	9
	188
	235
	236
	24
	68
	74
	159
	75
	228
	236
	182
	190
	143
	149
	96
	197
	23
	62
	140
	143
	182
	190
	59
	237
	211
	67
	159
	75
	228
	236
	9
	188
	235
	236
	24
	68
	74
	159
	75
	228
	236
	182
	190
	143
	149
	96
	197
	23
	62
	140
	143
	182
	190
	59
	237
	211
	67
	159
	75
	228
	236
	9
	188
	235
	236
	24
	68
	74
	159
	75
	228
	236
	182
	190
	143
	149
	96
	197
	23
	62
	140
	143
	182
	190
	59
	237
	211
	67
	159
	75
	228
	236
	9
	188
	235
	236
	24
	68
	74
	159
	75
	228
	236
	182
	190
	143
	149
	96
	197
	23
	62
	140
	143
	182
	190
	59
	237
	211
	67
	159
	75
	228
	236
	9
	188
	235
	236
	24
	68
	74
	159
	75
	228
	236
	182
	190
	143
	149
	96
	197
	23
	62
	140
	143
	182
	190
	59
	237
	211
	67
	159
	75
	228
	236
	9
	188
	235
	236
	24
	68
	74
	159
	75
	228
	236
	182
	190
	143
	149
	96
	197
	23
	62
	140
	143
	182
	190
	59
	237
	211
	67
	159
	75
	228
	236
	9
	188
	235
	236
	24
	68





[illegible]

む (体) 54 55 56 83 12 15 47 49 50 51 53  
 むうへんやく (無有変易) 164 210 216 230  
 無有変易 222  
 むかふ (向かふ) 36  
 むかひ 37  
 むかへり 24  
 むく (無垢) 37  
 無垢 36  
 むじやうしやうかく (無上正覚) 24  
 無上正覚 37  
 むにむべつ (無二無別) 82  
 無二無別 3  
 むね (胸) 16  
 むね 16  
 むべつ (無別) ↓ むにむべつ  
 むみやう (無明) 30 59  
 無明 30 59  
 むりやう (無量) 43 128  
 無量 43 128  
 むりやうじゆによらい (無量壽如来) 144

無量壽如来 202 224  
 むりやうじゆぶつ (無量壽佛) 172 193 214 223  
 無量壽佛 222 227  
 むりやうじゆみやう (無量壽命) 222 227  
 無量壽命 222 227  
 むりやうむへん (無量無邊) 45  
 無量無邊 45  
 む 45  
 むうほふくゑきやう (妙法華經) 162  
 妙法華經 162  
 むうほふれんぐゑ (妙法蓮花) 185  
 妙法蓮花 185  
 むうほふれんぐゑきやう (妙法蓮花經) 171 175  
 妙法蓮花經 171 175  
 めぐる (巡る) (四) 20  
 めくらむ 20  
 めくり 20  
 めくりて 144

めくるあひた 107  
 めくるとき 26  
 も 26  
 も 《助詞》 25 29 32 33 64 92 94 99 197 239  
 も 25 29 32 33 64 92 94 99 197 239  
 もし (若し) 《副詞》 15 42 61 71 72  
 もし 15 42 61 71 72  
 もしは (若しは) 《接続詞》 208  
 もしは 208  
 もちある (用ゐる) 239  
 もちあるきは 239  
 もとむ (求む) 55  
 もとめむ 55  
 もとも (尤も) 87  
 もとも 87  
 もとより (元より) 58 104 110 116 137 141  
 もとより 58 104 110 116 137 141  
 もの (者) 153 164 196  
 もの 153 164 196  
 もの (物) 153 164 196

もろもろ (諸諸) 22  
 もろく 22  
 諸 22  
 や 《助詞》 99  
 や 99  
 やう (様) 211  
 やうなる 211  
 やうに 211  
 やうやく (漸く) 67  
 やうやく 67  
 やがて 《副詞》 188  
 やがて 188  
 やかて 188  
 やく (益) 179  
 益 179  
 やくわうぼむ (藥王品) 179  
 藥王品 179  
 やぶる (破る) (下二) 28  
 やふれす 28

ゆ

ゆゑ(故)

ゆへ

24  
68  
69  
75  
111  
117  
152

ゆゑ

32  
135  
138  
160

よ

よ(世)

よ

160

よ(夜)

夜ヨ

141  
144

よ(余)

余ヨ

63

よく(能く)

よく

29  
70  
95  
205  
216

より《助詞》

より

16  
19  
63  
64  
66  
209

よりて(因りて)

よりて

128

よろづ(万)

よろづ

105  
206

ら

ら(等)《接尾語》

ら

44

らむ《助動詞》

らむ

196

り

り(理)

理リ

4  
177

り《助動詞》

り

37  
161  
166  
219  
221  
234

る

41  
66  
79  
123  
140  
185

りやくす(利益す)

利益セむ

52

りん(輪) ↓ あじりん

輪リ

26

る

る《助動詞》

れ

60  
99  
109

れ

れんぐゑ(蓮華)

蓮花

13  
34  
112  
112  
145  
184

れんぐゑさむまい(蓮華三昧)

蓮花三昧

42

ろ

ろくこん(六根)

六根

22  
23

ろくだう(六道)

六道

130  
143

ろくだうししやう(六道四生)

六道四生

107

わ

わが(我)《連語(代名詞十格助詞)》

わか

199  
202  
226  
238

わか

237

わかる(分かる)〈下二〉

わかる

237

わかれたる

わたす(渡す)〈四〉

わたしたまへ

126

わづかなり(僅かなり)《形容

動詞》

92

わづかにも

われ(我)

我レ

125  
126  
135

ゐ

ゐる(率る)

ゐて

175

ゑ

ゑ(絵)

ゑ

13

を

を《助詞》

お

を

223199176159129 93 69 46 11  
226200179163130 94 72 48 13  
227203180163136103 72 49 14  
227203187164147112 73 52 15  
230204189169150117 74 53 20  
233214190170150125 77 54 21  
234218194171153126 80 55 30  
238218195172156127 82 57 32  
183 239220196174158129 85 61 38  
66 38

## 漢字索引 凡例

一、本索引は、藤田美術館蔵『阿字義』に用いられている総ての漢字を、本稿の翻字本文に基づいて、収めたものである。

一、各項の記載形式は、見出し字・用例・用例の所在とした。

一、見出し字について

1. 見出し字の字体は、翻字本文にしたがった。  
ただし、翻字本文で区別した「釋―釈、佛―仏、華―花」は、検索の便宜上、用例数の多い方に一括して用例を掲げ、もう一方には、参照注記を立てた。
2. 踊り字は、漢字と見ず、対象外とした。
3. 見出し字の排列は、諸橋轍次著『大漢和辞典』にしたがった。

一、用例について

1. 用例は、翻字本文に基づいて掲出した。
2. 用例の引用は、原則として当該語のみを示した。ただし、活用語は、その用法に依じて下接語（または語句）も示した。
3. 用例の所在は、翻字本文に基づいて、算用数字で記した。
4. 用例の排列は、最終音節までの辞書順とした。
5. 用例の中、見出し字にあたる字は、「―」で示した。

一、本索引は、寺田守・小松原有子・馬野奈緒子が作成し、佐々木勇が確認した。

一、本索引の手順、製版のもとのファイル作成は、寺田守提案の方式がとられ、入力全般に亘って同氏の尽力が大きかった。







功 3  
徳 7  
能 1

則 7  
スナハチ 1

利 6  
サイ 1  
一切佛 セツ

利 5  
リヤ 1  
益

無二 5  
ムニ 1  
無

別 5  
ヘチ 1

急 5  
キウセツ 1

法 1  
サイホウ 1

佛利 1  
サイ 1

衆生 1  
スウシヤウ 1

衆生 1  
スウシヤウ 1

衆生 1  
サイスウシヤウ 1

力 部

78  
80  
10 81

4  
5

18

52

3

193

87

6

18

58

137

2  
114  
224  
237

53  
54  
132

薩 3  
ソ 3  
上 3  
縛 3  
上 3  
二 3  
婆 3  
去 3  
縛 3  
平 3  
101 112

口 部

又 0  
マタ 1  
124  
237

又 部

即 5  
スナハチ 1  
223

印 4  
イン 1  
103

冂 部

方 0  
ハウ 0  
三世 0  
2  
90

十 部

17  
81  
129

唐 7  
タウ 7  
房 7  
97

藥王 179  
ヤクワウ 156  
ホム 163

方便 161  
ハウ 163  
ホム 180

提婆 180  
タイ 180  
ホム 223

安樂 227  
アン 238  
ラク 238  
ホム 71

無量壽 74  
ムリヤウ 124  
スウミヤウ 125

短 71  
タン 71  
ミヤウ 124

壽 74  
スウミヤウ 124  
ミヤウ 125

命 5  
メイ 5  
カム 134

輪 4  
リン 4  
度 102  
平濁 102  
去 102

薩 101  
ソ 101  
上 101  
縛 101  
上 101  
二 101  
婆 101  
上 101  
縛 101  
平 101

土 0  
ツ 0

土 部

正 155  
セイ 155  
イン 155

因 3  
イン 3  
シヤウ 107

六道 39  
ロクダウ 39  
シヤウ 39

佛 39  
フツ 39  
ホサツ 39

方 17  
ハウ 17  
シヤウ 17

佛 17  
フツ 17  
ホサツ 17

善 9  
ゼン 9  
ナム 162

男子 162  
ナン 162  
シヤウ 122

女人 122  
ニョ 122  
シヤウ 122

善 9  
ゼン 9  
ナム 122



17 一駄 <small>タイ</small> 三 <small>ホウ</small> 〔寶〕	8 一 <small>シヤク</small> 静 <small>上</small> 〔寂〕	5 一 <small>シチ</small> 相 <small>サウ</small> 〔実〕	5 一 <small>チャウ</small> 〔定〕	5 一 <small>アン</small> 楽 <small>ラク</small> 品 <small>ホム</small>	5 一 <small>アン</small> 楽 <small>ラク</small> 界 <small>セカイ</small>	5 一 <small>アン</small> 楽 <small>ラク</small> 世 <small>セカイ</small>	3 一 <small>アン</small> 楽 <small>ラク</small> 行 <small>キヤウ</small> 〔安〕	4 不 <small>フ</small> 一 <small>ケウ</small> 〔孝〕	11 16 71 73 89 91 94	11 16 71 73 89 91 94	29 69 1
199 201	6	217 221	66	180	188	171 174 178 181	183 189	240	240	127	

6 〔度〕	8 如 <small>ニヨ</small> 来 <small>ライ</small> 一 <small>シヤウ</small> 住 <small>チュウ</small> 〔常〕	7 一 <small>クキ</small> 命 <small>ミヤウ</small> 〔帰〕	2 陀 <small>シヤ</small> 羅 <small>カム</small> 一 <small>ニ</small> 門 <small>ホトケ</small> 〔尼〕	9 世 <small>セ</small> 一 <small>シン</small> 〔尊〕	0 五 <small>コ</small> 一 <small>シ</small> 〔寸〕
3 部	3 部	3 部	3 部	3 部	3 部
	219 222	124 125	44	172	156

6 攝 <small>セウ</small> 一 <small>リシ</small> 儀 <small>キ</small> 戒 <small>カイ</small> 〔律〕	5 一 <small>カフ</small> 〔彼〕	4 一 <small>カタチ</small> 〔形〕	1 一 <small>イン</small> 攝 <small>セウ</small> する 〔引〕	5 除 <small>チヨ</small> 病 <small>ヒヤウ</small> 一 <small>ウ</small> 命 <small>エンメイ</small> 〔延〕	1 輸 <small>ス</small> 一 <small>ト</small> 〔平濁〕 含 <small>カム</small> 〔去〕
3 部	3 部	3 部	3 部	3 部	3 部
121	213 224	112 113	130	238	102

一 <small>シム</small> 性 <small>シヤウ</small>	一 <small>シム</small>	自 <small>ジ</small> 一 <small>シム</small>	一 <small>コ</small> 一 <small>ロ</small>	御 <small>ヲム</small> 一 <small>コ</small> 一 <small>ロ</small> 〔心〕	功 <small>ク</small> 一 <small>トク</small> 〔德〕	一 <small>コ</small> 願 <small>クワン</small>	一 <small>コ</small> 名 <small>ナ</small>	一 <small>ヲム</small> 消 <small>シヨウ</small> 息 <small>シツク</small>	一 <small>ヲム</small> 一 <small>ス</small> かた	一 <small>ヲム</small> 一 <small>コ</small> と	一 <small>ヲム</small> 一 <small>コ</small> 心 <small>シン</small>	一 <small>ヲム</small> 一 <small>イ</small> のり	9 〔御〕	
				4 心 部										
24	61 225	150 158	65	127 140 147 148 163 188 204 225 226	12 34 38 42 58 67 87 103	149 209	78 80 81	211	123	97	113	214	149 209	209

6 〔息〕	ホシヤウシヤウ上 本―清淨	心― シムシヤウ	自―清淨 シシヤウシヤウ上	5 〔性〕	キウセツ ―切	5 〔急〕	シユイ ―惟	5 〔思〕	乱 ミタレヲモヒ	ネムフツ ―佛	ネムフツ ―佛	ネム ―する	―し	ネム ―し	観 クワンネム	4 〔念〕	ホタイシム ―菩提	シムチ ―中	シムシヤウ上 ―清淨	
	3	24	135 139 225		87		72		84	216	228	223	231	215	95	103	4	75	84	67
13 〔應〕	大―悲 タイシヒ	大― タイシ	9 〔慈〕	ニヨイリンクワンシサイ 如―輪觀自在	身語― シンゴイ	9 〔意〕	シユイ ―思	8 〔惟〕	ネウヤクウシヤウカイ 饒益有―戒	8 〔情〕	大慈― タイシヒ	8 〔悲〕	三―道 アカタウ	―業 アカコウ	7 〔惡〕	煩― ホンナウ	7 〔惱〕	―地 シツチ	7 〔悉〕	御消― ヨウセウソク
	233	234		138	104		72		122		233		165 167	108		30 108 144		53		97
	0 〔手〕 タナコ、ロ			4 〔房〕 タウハウ				4 〔戸〕	ネウヤクウシヤウカイ 饒益有情― ホサツカイ 菩薩―	セウリツキカイ 攝律儀―	セフセムホウカイ 攝善法―	三聚淨― シュウセウ 三聚淨―	―經 カイキヤ	3 〔戒〕	3 〔我〕 ワレ			4 〔戈〕	―身 ヨウシン	
		4 〔手〕 部																		
111				97					121 152	122	121	122	123	152		125 126 135				119
	11 〔敷〕 カイフ	8 〔敬〕 ウヤマヒ	8 〔散〕 サン	7 〔救〕 スクヒタマ	―給へ															
	開―	―て	―して	給へ							セウリツキカイ ―律儀戒	セフセムホウカイ ―善法戒	引ンセラ ―攝	菩―心 ホタイシム	菩― ホタイ	―婆品 タイハホム	8 〔掌〕 タナコ、ロ			
38 42		164	17	125				4 〔支〕 部												
											121	121	130		4 75	49	161 163		112	

七

ノリ	攝善	諸	一切	ミツ	スイシヤウ	ハ	生	シ	90	2
	セフセムホウカイ	シヨホウ	サイホウ				シヤウシ		127	15
	戒								147	38
									150	39
										61
										73
										74
										78
90	122	217	145			237	143	78		86
		220	146	25						
		6								

[illegible][illegible]





タシミヤウ  
命

71

5 石部

11 [磨]

娑縛婆縛秣駄薩縛達

132

5 禾部

4 [秋]

アキ

5 [秣]

スウタ  
駄

スウトカム  
度含

9 [種]

タネ

9 [稱]

シヨウ  
する

5 穴部

3 [空]

コク  
虚

80

5 [第]

6 竹部

タイ  
一

153

8 [精]

スイシヤウ  
水

6 米部

6 糸部

4 [純]

シユン上  
淨

シユンスク  
熱

6 [給]

スクヒタマ  
救

トキタマ  
説

7 [經]

カイキヤ  
戒

キヤウ

クワンムリヤウ  
觀無量壽

ネハムキヤウ  
涅槃

219 154 186 234 152

12 15 23

25

ネムフツ  
念佛三昧

ホウクエキヤウ  
法花

メウホウクエキヤウ  
妙法華

メウホウレンクエキヤウ  
妙法蓮花

10 [縛]

薩(上)ハタル  
達(上)磨(上)

101

薩(上)ハタル  
達(上)合婆(去)縛(平)

101

薩(上)ハタル  
達(上)合婆(去)縛(平)

101

薩(上)ハタル  
達(上)合婆(去)縛(平)

101

薩(上)ハタル  
達(上)合婆(去)縛(平)

102

娑(上)ハタル  
縛秣駄薩縛達磨

131

娑(上)ハタル  
縛秣駄薩縛達磨

131

娑(上)ハタル  
縛秣駄薩縛達磨

131

娑(上)ハタル  
縛秣駄薩縛達磨

134

娑(上)ハタル  
縛秣駄薩縛達磨

134

11 [摩]

薩(上)ハタル  
縛達(上)磨(上)

101

6 網部

14 [羅]

陀(上)ニモ  
尼門

曼茶

62 44

6 羊部

7 [義]

阿字

1

6 老部

4 [者]

イハ

104 187

修(上)ハタル  
行(上)ハタル

86 19

6 耳部

7 [聖]

七六



スウ   (去) 度 (平濁) 含 (去)	スウ   (去) 駄 (平濁)	9 〔輸〕	リン 如意 觀自在	ニョイ リンクワン シサイ	月 	阿字   クワチリン	8 〔輪〕	7 車部	本   ホシタイ	タイ 	一   三寶	5 〔躰〕	法   ニョライ	ホウシン   如来	法 	ホウシン 	報 	ホウシン 	三 	三 
102	101	26	138	13	29				121	6	199		110	20	5	119	119	114		

無量 無 	15 〔邊〕	長 	10 〔遠〕	ソハハ ハスウ タサル ハタル マ	娑縛婆 縛鉢 駄薩 縛磨	薩 上 縛 上 磨 上	9 〔達〕	六   四生	六 	三惡 	9 〔道〕	一   せむ	9 〔遍〕	釋   牟尼佛	シヤカ ホトケ	釈   佛	5 〔迦〕	7 是部
45		74		131		101		107	130	165		18		172	173	168		

11 〔鏡〕	8 金部	無   壽命	ムリヤウ スウミヤウ	無   壽佛	ムリヤウ スウフツ	無   壽如来	ムリヤウ スウキヤウ	無   觀無   壽經	クワンム リヤウスウ キヤウ	5 〔量〕	7 里部	一   迦牟尼佛	シヤカ ホトケ	釈   迦牟尼佛	シヤカ ホトケ	一   迦牟尼佛	13 〔釋〕	4 〔釈〕	7 采部
105		45	222	227	214	202	43	154				172	173	168					

5 〔阿〕	8 阜部	世   ケシ	4 〔間〕	カイフ   敷	4 〔開〕	法   ホウモン	不滅   フメツ	陀羅尼   タラニモン	三昧   マイモン	阿字   アジモン	0 〔門〕	一   遠	チヤウ スウ	一   壽	チヤウ スウ	0 〔長〕	8 長部	7 八
		26		38	42	43	45	75	44	44	69		74	72				

